

日本基督教団  
柿ノ木坂教会

牧 師 渡邊 義彦  
協力牧師 松下 恭規

# 教会報

182号 2017年 8月 13日

〒152-0022

東京都目黒区柿の木坂

1-31-19

電話：03-3717-3870

Fax：03-3717-3916

## 巻頭言

### 「キリストの善き僕として」

——フィリピの信徒への手紙第2章19～20節——

牧師 渡邊 義彦



さて、わたしはあなたがたの様子を知って力づけられたいので、間もなくテモテをそちらに遣わすことを、主イエスによって希望しています。テモテのようにわたしと同じ思いを抱いて、親身になってあなたがたのことを心にかけている者はほかにいないのです。（新共同訳聖書）

パウロは、今、自分の命がどうなるのか、決定が下されることを目前としています。判決が下されて、この地上の生命を終えるのか、放免されて、なお地上の生命を生きることができて伝道のため力を尽くすことができるのか、その判決を間近にしています。パウロは、今、牢獄に囚われています。福音を伝道したことが理由です。判決が正と下っても、否と下っても、拘留が終わることを意味しています。福音を伝えることが脅威と思われている世界にパウロは生きています。人々をたぶらかし、社会の安寧を乱す者と疑われ、パウロは殺されようとしています。

このような中で、しかし、パウロは希望を失っていません。パウロにとって地上の命をなおも生きることはもちろん希望です。そして、たとえ死なねばならないとしても彼から希望は決して失われません。パウロは、牢に囚われながら希望を失っていません。そこから自由に教会を、兄弟姉妹たちを訪ねて行き来することができず体の自由は奪われてしまっているけれども、

魂の自由、霊の自由、信仰の自由ゆえの希望を決して失っていません。牢に拘留されることで自由を奪われています。自由に教会に赴き兄弟姉妹といっしょに席を同じくして神を賛美することができないでいます。兄弟姉妹のために神の言葉を取り次ぐ務めを果たせないでいます。それでパウロは弱り果てて、自由な身のときにあれもやっておけばよかった、これもやっておけばよかった、あれもできない、これもできないと悩み、悔やんでいるかと言うと、まったくそうではありません。彼は囚われている中で、できる限り精一杯のことをしています。パウロが囚われている牢獄は、まるでそこが伝道基地であるかのように、そこからさえも福音が発信され、伝道のため指令が伝えられ、兄弟姉妹たちのためのとりなしの祈りが献げられ、罪に悩む兄弟姉妹のため牧会がなされます。ここから神が賛美されています。パウロは、シラスに伝道すべき福音を伝えます。パウロは、テモテに教会を熟練した建築士のように建て上げてゆく術を伝えます。あの兄弟、姉妹たちのために祈っています。あの教会、この教会のために手紙を書いています。顔と顔を合わせて、直接、相見ることにはできないけれども、まるで、教会に共にいるかのようにして兄弟姉妹たちに語りかけています。パウロが牢に拘留されることは、パウロにとってまとまって思索できる時であり、身の自由を奪われるようなときこそ、

手紙を書くことが最もよい伝道のための手段であり、牧会のための手段であったのでしょう。

パウロは、愛する弟子であり、同労者であるテモテを自分のもとからフィリピ教会に遣わす準備をしています。パウロが牢獄で厳しい毎日を送っている。解放か、殉教か、判決が近い。そのような切迫した中で愛する弟子が近くそばにいてくれることに、パウロもどれほど力づけられ、助けられたことでありましょうか。しかし、今、教会のためにテモテを送り出すことが必要と決断したのでしょう。テモテを再びフィリピ教会に送る準備をはじめます。牢獄に監禁され、判決を間近にしているパウロの窮地に、テモテをフィリピ教会に遣わさなければならぬ事情が、フィリピ教会にもあったのだと思われれます。最も信頼する弟子、同労者を、フィリピ教会のために遣わすことを、パウロは決断しました。

パウロは、牢に捕らわれ、自由を奪われ、なおここで、主にすべてを委ねて祈ります。主イエスによって、テモテがフィリピ教会に遣わされること、主によって、パウロの解放が成って、彼もまたフィリピ教会に赴けること、すべてを、主に委ね、祈り待ち、いつでも出発できるよう、祈り、備え、準備しました。この地上の生命がここで終わり、召されたとしても一向に悔いは残らない、との思いであったことでしょう。地上の生命を終えて、キリストのもとに移されることは、わたしにとってほんとうに望ましいことであり、それこそほんとうの至福である、とパウロは告げることができました。パウロには、地上の命にこだわり、拘泥する思いは微塵もありません。いつ召されてもよい。いつこの地上の生命が終わってもよい。悔いは残らない。精一杯、神の御前に生きてきた。神からいただいた生命を、身体を、霊を、魂を、神のために用いてきた。パウロは、そう言い切ることができました。しかし、一方で、主によって、まだわたしが地上の生命を生きるのであるのなら、わ

たしはなお精一杯、あなたがたと伝道してゆこうと思っている。これもまた、パウロの偽らざる思いです。

生きるにしても、死ぬにしても、キリストが、パウロの最大の関心事なのです。

いつ召されてもよい、いつ地上の生命が終わってもよい、悔いは残らない。そういう生き方をしたい、そう思います。精一杯、神の御前で生きたい、そう願います。神からいただいた生命を、身体を、霊を、魂を、神のために用いるのです。パウロは、そう生きました。テモテも、シラスも、そう生きたのです。彼らと一緒に、主によって、生かされてきた兄弟姉妹たちも、2千年の教会の歴史の中で教会を建て上げてきた、幾多のキリスト者たちもそう生きてきました。日本に福音を届けてくれた宣教師たち、彼ら、彼女らに続く日本人キリスト者たち、わたしたちの先輩たちもそうでした。神の御前で精一杯生きた者たちの信仰がわたしたちのところにまで届けられているのです。この福音の伝達を、わたしたちのところで滞らせてはなりません。主の救いをなお待ち望んでいる人たち、主の憐れみを待ち続けている人たちが、この町に、この国に、世界になお残されているからです。

### 集会出席統計（月平均人数）

	2017年	
	5月	6月
主日礼拝	88.5	98.3
聖書と祈り会	13.2	13.8
教会学校*	121.3	112.3

\* 保護者、教師を含む

(第1主日開催)	5月7日	6月4日
聖餐夕礼拝	13	8

## 「不思議なこと」

棟居 湘子

聖書の中でそれが映像化され切なく迫ってくる箇所があります。

ペトロがイエスの予告どおり、鶏が鳴く前に3度イエスを知らないと言う場面です。ルカは「そして外に出て激しく泣いた」と書いています。

ペトロはどんなに情けなかつただろう、どんなに切なかつただろうと・・・でも、人間って本当にこのペトロとおんなじだと思ひ、一緒に泣きそうになります。そのペトロにイエス様は「私の羊を飼いなさい」とおっしゃり、ペトロを初代キリストの教会の指導者となさいました。

さて、毎年秋になると我が家に岩国教会から永眠者記念礼拝のお知らせが届きます。これは棟居の両親が亡くなってから受け取る様になったのですが、正の祖母とその妹が記念されています。その物故者リストのなかに私の母の祖父母や、私も会ったことのある親類の名前も何人か出てくるのです。思ひがけないことでした。

祖母はこのリストに載っていないのですが、広島女学院時代に洗礼を受けた様です。

生きている時に聖書を読んだりお祈りをしているところなど見た事はありませんでした。ただ「おばあちゃんのベビーオルガン」があり、私に楽譜と鍵盤の関係を教えてくれたのはこの祖母でした。

私はキリスト教とは全く無縁の家庭で育ちましたが、中高6年間キリスト教主義の学校にいたこと、また結婚して子供を授かった事が分かった時に一番の準備は受洗する事だと思つたのです。

私の父は元気な時は「わしには神は要らない。」などと言っていました、ある時どう言う訳か「私には杖が必要になった。」と言ひ、母と一緒に教会に通ひはじめ揃つて受洗しました。

「老いる」と言うことはとても素晴らしいことだと思つたものです。

そして、それこそ「生まれる前から」教会に通つていて大学生になっていた娘が「あのおじいちゃんを変えたのは何だつたのだから？」と思ひ、続けて受洗しました。

母は晩年ホームで過ごし101歳で亡くなるまで、やりとりが出来ました。歌うのが好きだったので、一緒に讃美歌を歌いました。耳が遠いせいかしょっちゅうピッチが変わるので、合わせるのが大変でした。

古い讃美歌の歌詞はほとんど諳んじていました。おそらく小さい時にあのベビーオルガンで祖母が教えたのだと思ひます。古い讃美歌の他に母は「心を高くあげよ」が好きでした。4番の「終わりの日が来たなら さばきの座を見上げて わが力の限りに 心を高くあげよ」をどれくらい自分のものとして歌つていたのでしょう。

毎年、イースターの季節には私あてに鎌倉雪ノ下教会から墓前礼拝の案内が送られて来ます。この礼拝に出席する度に、「何て不思議なことが・・・」と思わされます。

小川先生が「わたしどものおもいをこえて」とよく言つていらしたことが実感できる出来事です。

## 伝道月間「愛餐会ウラ話」

鶴田 真希

伝道月間の六月は伝道委員にとっては最も忙しい月です。

特に愛餐会に関しては毎回頭を悩ませているところではあります。まず会の司会者の人選ですが、これは基本的には講師の先生と多少ともゆかりのある方をお願いしています。

そして興味深いお話を引き出して下さったりして会がなごやかに運ぶ大きな力になっていると思われまふ。そのためもあって先生方は礼拝の時と変わってリラックスした別の顔を見せて下さいます。ちょっと笑える楽しいお話をされることもあって得した気分になれます。

次に愛餐会のお食事についてです。ひと月に二回、しかもその時の先生方の都合で二週続けてという場合もありますので、まさか同じメニューというわけにもいきませんよね。パン食、米食と分けていて、特に理由はないのですがなんとなく講師の先生のうち年齢が高いほうが米食となってしまうがちです。パンはここ何年間お馴染みのお店のサンドウィッチです。

ここは手づくりでボリューム感があるにもかかわらずリーズナブルなので定番メニューですんなり決定です。

が、しかし米食のほうはいつも試行錯誤のくりかえしです。ある時のお弁当はボリュームがありすぎて皆さん少々持て余しぎみだったり、逆に少なめのお弁当はチープ感のただよう残念な印象だったり、味付けが濃いか野菜が欲しかったとか言われたり、これぞ究極の愛餐会弁当だ！と言えるものになかなか出会えません。

会費の中でのやりくりですから甘味を選ぶにもリサーチ(チョット大げさ?)が必要です。

何種類かのお菓子を試食してみて胸やけをおこしたり、一袋に何枚お煎餅が入っているのか数えてみたりと、みみっちくも細かい作業をしてからの決定となります。フルーツポンチを作っていた時もありましたが、最近ではチェリーなどでこれも1人分のグラム数を計ってから全体の用意する量を決めたりして緻密な計算が必要です。

このところの出席人数は35~40名となっています。予想に反してお弁当が足りなくなるのはうれしい誤算ですね。

もしもみなさまに何か良いアイデア、良いお弁当の情報がありましたら参考にしたいと思ひます。

愛餐会の裏の事情はともかくも、皆で同じ食卓を囲み、同じ食事を口にして語り合う時間は私たち一人一人が教会に連なる幸いをおぼえる豊かな恵みに満ちたものと思われまふ。

できるだけ多くの方々と愛餐会を共にできまふようにと願っています。



↑ 愛餐会のひとこま(2016年6月26日)

## 6月の伝道月間レポート

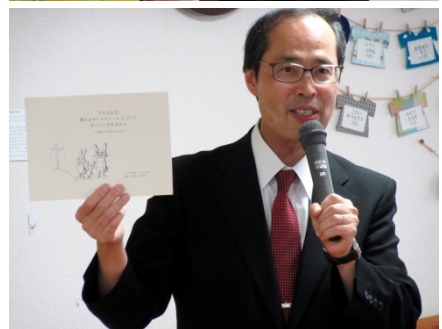
4日／柿ノ木坂教会 渡邊 義彦 牧師、11日／柿ノ木坂教会協力牧師 松下 恭規 牧師、18日／東京神学大学学長 大住 雄一 牧師、25日／東洋英和女学院 中学部高等部 宗教主任 高橋 貞二郎 牧師

### 愛餐会の様子

18日／東京神学大学学長 大住雄一 牧師を囲む



25日／東洋英和宗教主任 高橋貞二郎牧師 を囲む



### ◆これからの教会の行事予定◆

- ◇7月30日（日）～8月1日（火）教会学校丹沢サマーキャンプ
- ◇8月27日（日）教会学校幼稚科デイキャンプ、ジュニアチャーチタ涼み会
- ◇9月24日（日）南支区教会学校合同運動会（玉川聖学院体育館で）

## 今月のメッセージ

—ホームページ巻頭言 から—

ホームページには多くの情報が掲載されています。  
ぜひご覧ください  
<http://kakinokizaka-church.com>

わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。(新共同訳聖書・ヨハネによる福音書第15章5節)

はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。(新共同訳聖書・ヨハネによる福音書第12章24節)

幼稚園の教師に請われて、ぶどうの袋がけを手伝いました。園庭のフェンスに沿ってぶどうの木を這わせてあるのですが、ここ毎年豊作です。今年も100房ぐらい袋がけをしたのでしょうか。高さ2メートルほどのフェンスですから、下の方は園児のお母さんたちに手伝ってもらって袋をかけられましたが、フェンス沿いの植木にぶどうの蔓が伸びていって高いところにもたわわに実っているのです。これは脚立の上に上らないと届きません。そこで出番となりました。

一つの枝から幾房も実っているのですが、一番元気そうな房に袋がけて、その回りの房は摘果します。せっかく実ったのにもったいない気もしますが、おいしいぶどうを収穫するには大切な作業です。摘み採った房は、まだ青くて固いのですから、そのまま食べることは出来ませんが、家内が熟していないぶどうの

利用法を何やら探してきて挑戦しています。子供たちが夏休みを過ごして元気に2学期に幼稚園にやって来る頃には、だいぶ色づいた房が出来ているでしょう。楽しみです。

このぶどうの木は、鉢植えの小さな観賞用のぶどうを、教師が試しに園庭の土に降ろしてみたら、日当たりも良かったのか瞬間に大きな木になったのです。春先は、蔓も若葉も伸びるのが目に見えるのではないかというほどに、毎日毎日たくましく蔓を伸ばし葉を茂らせていきます。ぶどう棚を作るのも一つかもしれませんが、そこまですなくてもフェンスの回りを整理してもう少し上手に這わせてやったら日当たりも良くなって袋がけもしやすくなるかもしれません。

種から芽が出て、茎を伸ばし、葉を茂らせ、花を咲かせ、実を実らせ、熟し、地に落ちて種となって、新しい草木となってゆく。この自然の営みを取り上げられて、主イエスは、御自身の十字架の死と、キリストの死によって救われる者たちのことを教えてくださいました。そして生み出されたキリスト者たちが、キリストから離れることなく育てられていくことをぶどうの木のたとえで教えてくださいました。御言葉が日々の生活と結びつくことの幸いを思います。

(牧師 渡邊 義彦)

### —編集後記—

- ・今年の「伝道月間」も出席が100名を超える礼拝もあり、感謝いたします。その午後には開かれた2回の愛餐会も、大変よい会でした。様子を写真でご覧ください。また、伝道委員会のご苦勞の一面もお読みください。
- ・「聖句・讚美歌」に書いてくださった姉の「私たちの思いを越えて」という言葉に、主の御支えを感じます。
- ・今年も教会学校の夏の行事が神のお守りの内に進められますように。
- ・教会報へのご意見、ご感想をお寄せください。  
(編集委員長 井澤浩一)

### 集会案内

主日礼拝 日曜日 午前10時30分  
聖餐夕礼拝 第1日曜日 午後5時  
入門講座 日曜日 午前9時30分  
教会学校 日曜日 午前9時  
(幼稚科、小学科、ジュニアチャーチ)  
\*ジュニアチャーチは中学生、高校生です。  
聖書と祈り会 水曜日午前10時、午後7時30分

日本基督教団 柿ノ木坂教会  
〒152-0022 東京都目黒区柿ノ木坂1-31-19  
電話 03-3717-3870 (教会・牧師館)  
03-3723-3870 (ベテル幼稚園)  
牧師 渡邊 義彦  
協力牧師 松下 恭規